

今年に入ってからすでに半年が過ぎ、この間に感想文を書く気で自分なりに厳選していくつかの能を観ました。でも構えて書こうとすると、とても難しい。その上歳月を重ねて能の深さを知り、怖気づくせいもある(常識のある人は初めに気づくことだけど…)。そこで能観賞は私の脳の体操と開き直り、無邪気な原点に立ち返って、また見てきたこと感じたことを綴ります。

「山姥」7月9日(土)宝生能楽堂 シテ・味方玄 ツレ・谷本健吾 ワキ・宝生欣哉 地頭・片山九郎衛門
大鼓・亀井広忠 小鼓・成田達志 笛・藤田六郎兵衛 太鼓・観世元伯。その他。

この公演のお目あてはシテの味方玄(しずか・50歳)さん。関西で大人気の能楽師と聞き、一度「千手」を観に行ったのですが、その時はツレ(重衡)の役で芸はさすがだと思いましたが、直面だったので(童顔の貴公子!)、今度は面を付けた役の能を観たかったからです。

「山姥」当日は、なるほど見所は満席で7割方が女性。熱心なファンが多いのが窺えます。

私はこの公演に先立ち、鎌倉能舞台で開催された事前講座に参加。玄さんの話は面白く、参加者が(私も)内容を書きとめようとする、柔らかい京言葉で「メモをする人がいるようですが、能は見てのお楽しみ。解説内容を本番でなぞるように見るのは詰まりませんよ」(笑い)…と。

お父上・味方健師は能楽師にして文学博士で能関係の著書も多数という方。そのせいか玄さんの解説も文献が多く引用されていました。そんな訳でメモなしの私の記憶で印象に残った話の一つ。

「山姥」の前場は、山姥の山廻りの曲舞で評判を取った都の遊女・百万山姥が長野の善光寺に参詣しようと険しい山道を歩いていると、辺りが急に暮れ、里女(実は山姥の化身)が現れ、自分の庵に招いて、遊女の山姥の曲舞を観たいと所望します。その理由は「あなたは私の曲舞で都の評判を取っているのかかわらず、少しも本物の山姥の私に対して心をかけていないことを恨んでいる。供養をしてくれても良いはずだ。それが無いから私は輪廻を逃れられず極楽へ行くことができない。どうか曲舞を舞って私の執着を晴らして欲しい」と。この辺りは詞章にもはっきり書かれていますが、山姥という能を理解するには、これが大きな要素であると講座で説明されました。

「山姥」は私にとって、とても難解な曲ですが、こういう人間臭い煩惱が根底にあると聞くと、すごく身近な感じになります。(いずれは大自然を表現したスペクトルだという見方に近づくかも)。

物語は後場に入ると里女は山姥の姿になって、大変変化に富んだ所作で、山廻りの苦しいさまを示したりします。詞は仏教用語がふんだんに出てくるので、仏教に対する素養がないと今一つ分かりませんが、動きの大きい能なので、見ていて退屈することがなく魅力的です。

玄さんの山姥は、実に洗練されていて、深く伸びのある声と言ひ、パーフェクト!といえる所作の美しさ等、さすが人気演者らしいオーラが感じられ素晴らしいものでした。今までに見たことがある「山姥」の荒削りさとか、野性感とは違うので、これまた新しい経験でした。

ところで、かねがね「山姥」の物語の中で、山姥は人の目には見えないが、人々の暮らしを助けて、薪の重荷を負ったり、機織りをするを手伝ったりする挿話が、とても唐突だと思っていましたが、杉田博明・三浦隆夫共著の『能百番を歩く』の山姥の項を読むと、舞台となった上路(越後・上路山)には山姥伝説があり「その昔、上路の山奥に山姥という鬼女がいて、村を襲って村民を苦しめていた。そこで村では山姥を神として祀ったところ、村の人に金銭を恵んだり、子供を守ってくれる善神となった。商売繁盛、知恵、踊りの神として村人の信仰を集めるようになった」と。この民間伝承を巧みに劇化したのが能「山姥」だそうです。これでかなり私の謎が解けて、胸もスッキリしました。

このように能は、ふっと気がついたり、はっと目を留めたりすることで、丁度薄紙を剥ぐように少しずつ内容が分かり、感動したり、新しい発見があるので、いつまでも新鮮であり興味が尽きません。これが七百年近く続いて来た能の不思議な魅力の一つだと私は思うのです。

尾崎 純子